

# 小説部門選評

選評

坂上弘

感想

佐伯一麦

選評

長野まゆみ

受賞作の「銀ぎつね」は、冒頭の狐小屋が  
狐達によつてこわされ彼等が自由になる光景  
が鮮烈である。それがあつたのは、母の実家  
で商社のような「山久」の裏手で、幼い主人  
公は母に連れられて身を寄せていた。昭和の  
戦時中祖父が率いる総合商社のような一家は

戦後間もなく祖父の急死で崩れて行くが、母  
は夢の中でわが子が祖父にかわいがられ連れ  
て行かれなかつたことに安堵したという。こ  
うした戦中戦後の一族の難儀の中で、主人公  
はさまざまな喪失の思い出を抱くようにな  
る。家族の崩壊がこの作には色濃く写し出さ  
れている。時代を含めてあらためて描かれた  
大事なテーマだと思う。人間は、家族として  
生きるとき勁い。